

総合人間科学と人間学

水 島 恵 一

1. 文教大学人間科学設立の頃

1976年（昭和51年）、私は文教大学において、人間科学部設立の音頭をとることになり、それに伴って、総合人間科学や人間学の理論と方法論を本格的に探索していくことになったのであるが、その後16年間人間科学部長を続ける原点になった、当時の私自身の歩みを、あえて一人称で記すことで、与えられた紙面を使わせていただきたい。（なお厳密には、1976年4月人間学部発足時は「立正女子大学」であり、その年に男女共学として名称が「文教大学」に改められたものであることをおことわりしておきたい。）

それまでも私は、家政学部児童学科を中心とした大学の教育の中で、大幅に学生個人個人の興味と発想による自主研究を取り入れてきたし、臨床関係の現場実習、その他多くの体験学習を導入してきた。大幅なTグループ的、エンカウンターグループ的学習を取り入れるなど、人間性の主体的発露に焦点を当ててきたといってもよい。児童学科主任として、あるいは全学の教務委員長として、そういう面からも教育改革にとりかかろうとしていたのであって、このことは意識的無意識的に、その後、総合人間学科、とくに実践的人間学科の体系を構築していくに当たっても、一つの理念となっていった。学問の体系を問題にするだけでなく、それに関わる教員自身あるいは学生自身の個性と主体性をどう捉えられるかが、同時に重要になるという視点である。

それは人間科学部設立に当たって、一方で（当然のこととはいえ）現存する教員の特性を生かした（同時にその意思を生かした）運営や科目設定をすることであり、その上で、できるだけ、科目の全体的関連をもたせることであった。私たちの設定した科目は、表に掲げるようなもので、心理学、社会学、教育学の柱にそれぞれ 心理臨床、社会福祉、児童教育（のちに生涯教育に発展）を前面に打ち出し、また、総合コースを設けて、生活学、人間学としての色彩をもたせたものであった。

表1 文教大学人間科学部人間科学科の専門科目

基礎教育科目	〈3年〉	選 択 科 目	東 洋 哲 学 史
〈1年〉 数 理 統 計 法 社 会 理 想 史 西 洋 哲 学 史 行 動 科 学 基 礎 論 基 礎 生 理 学 生 態 学	人 間 学 特 殊 研 究 臨 床 心 理 学 特 論 実 験 心 理 学 社 会 行 動 学 心 理 学 特 殊 研 究 社 会 調 査 実 習 家 族 社 会 学 地 域 社 会 学 教 育 社 会 学 社 会 学 特 殊 研 究 社 会 福 祉 方 法 技 術 社 会 福 祉 特 殊 研 究 教 育 方 法 論 教 育 心 理 学 特 論 児 童 学 特 論 児 童 文 化 児 童 教 育 特 殊 研 究 教 育 学 演 習 I	〈2年〉 心 理 測 定 大 腦 生 理 学 社 会 学 理 論 集 団 論 ・ 組 織 論 福 祉 社 会 学 教 育 法 規 程 障 害 児 教 育 学 児 童 文 学 児 童 福 祉 学 遊 戯 論 日 本 文 化 史 生 理 学	文 学 論 言 語 学 論 科 学 論 家 政 学 論 法 律 学 論 経 済 学 論 児 童 臨 床 心 理 学 幼 児 教 育 学
必 修 科 目			〈4年〉 精 神 分 析 カ ウ ン セ リ ン グ 演 習 臨 床 心 理 学 演 習 児 童 臨 床 心 理 学 演 習 心 理 学 特 論 社 会 福 祉 特 論 社 会 福 祉 演 習 社 会 学 特 論 児 童 学 演 習 生 活 指 導 道 徳 教 育 の 研 究 教 育 心 理 学 演 習 児 童 文 化 演 習 小 児 保 健 学 幼 児 教 育 学 演 習 哲 学 的 人 間 学 特 論 倫 理 学 芸 術 特 論 言 語 学 特 論 生 化 学 体 育 学 生 活 デ ザ イ ン 政 治 学
選 択 必 修 科 目	〈4年〉 人 格 心 理 学 演 習 実 験 心 理 学 演 習 発 達 心 理 学 演 習 社 会 心 理 学 演 習 家 族 社 会 学 演 習 地 域 社 会 学 演 習 教 育 社 会 学 演 習 教 育 学 演 習 II 教 育 心 理 学 I 児 童 学 教 育 原 理 II 教 育 心 理 学 II 生 活 人 間 学	〈3年〉 行 動 生 理 学 カ ウ ン セ リ ン グ 人 間 学 特 論 臨 床 実 習 精 神 医 学 人 間 関 係 論 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 論 生 活 構 造 論 社 会 病 理 学 教 育 制 度 論 教 育 行 財 政 学 教 育 環 境 学 教 育 心 理 学 III 哲 学 的 人 間 学 宗 教 学 生 活 文 化 論 生 活 環 境 学 芸 術 論 文 化 人 間 学 特 論	

総合の第1の試みとして、当然のことながら、私たちは、研究会を重ねた。人間科学のさまざまな分野の人々を招いた会も行ってきた。これに加えて文部省の総合科研費を得て、大部分の教員と多くの学生を巻き込んだ、共同研究が、設立初期に行われたことも付記しておきたい。この共同研究は、「体験と意識に関する総合研究」で、社会的条件・生活構造と意識というマクロ的アプローチから、感情構造、深層心理などのミクロ的アプローチまでを総合的に生かそうとしたものであり、また心理学、社会学、教育学分野からのまさに「総合」をねらった試みとして紹介し

たいところであるが、紙数の関係で省略する。

第2に前述した科目一覧が示すように、生活学・人間学の設定が、私たちの特色ともいえるもので、とくに生活学は家政学部からの発展的改組として人間科学部を創設したという文教大学の特殊事情にもよるものであった。この事態に対応して、私のなかでは、人間学的方法論を、内面的人間学のみならず生活学に適用しようとした「生活人間学的」理念が、ひとつの人間科学総合の拠り所ともなっていた。それは生活学的諸問題を内面的人間学と結びつけ、かつ現代社会の中で変革的な意味をもつことであった。初期の二年次の「生活人間学」という科目では、学生を小グループに分け、さまざまな関心を生かしながらグループのテーマをつくらせ、そしてまた、そのグループの中でも個人個人が自分のテーマを深めていくという方式をとったのであった。そして何人かの教員が数グループづつを分担し、そこで個々の学生の個性を生かしつつ、全体の発表会を通じて、ひとつの総合人間学が発展することをねらったのであった。

（注、個々の教員が総合人間科学に向かいつつも、それぞれ独自の専門研究を行なっていくのと同様、学生においても、どんな学生のどんな人間科学的な試行も抱擁していく学部でありたい。それが学部全体に託した私の願いであった。とくに学生には、まだ総合などということはとても望むことはできない。むしろ、さまざまな個性的な人間科学的アプローチをすることが、人間科学部の基本でなければならない。こうした理念が少なくとも私の根底にあった。人間科学の総合性と、個人個人の特性に応じたアプローチをできるかぎり抱擁するということを、不即不離のものとしてとらえたのである。）

第3に、文教大学の人間科学の特色として、実践科学としての総合性をあげておきたい。研究設備も貧弱で、敷地・建物・研究費とも劣悪な文教大学において、その長屋の雑居暮らしのような中で培われてきたもの、そしてとくに児童学科あるいは生活福祉において私たちがかろうじて誇りえたものは、研究室を出た実践の学であり、それはそのまま私たちの人間科学部の特徴になっていった。端的に言えば、具体的な個々の人間を見据えながらの実践にもとづくかぎり、人間科学のあらゆる分野は必然的に協力せざるをえない。そして文字通り心理学、社会学、教育学等々が一体となった総合的な人間科学部が成立する。それは高度に専門化した心理学や社会学や教育学のそれぞれが、便宜上一つの学部の中に入れられたというのとは根本的に違う。そこに私たちは専門分化した高度のアカデミズム以上の何ものかを築いていくことができるであろう。このことはまた後で述べる。

2. 体験的人間学

他方私は自分なりの総合的人間科学に基づいた人間学を確立することをめざした。「人間学」を学部の総合の柱とすることについては、それほど突き詰めた合意が学部の中にあっただけではない。いわば一応の了解事項であった。人間学として人間観を打ち出していくその内容は、いかに現代人間科学に立脚するとはいえ、多かれ少なかれその人なりの哲学にならざるを得ず、それ

をもって学部の共通理念とすることはできない。しかしとくに実践の学が、何らかの理念を持たざるを得ない以上、学部研究者の少なくとも何人かが、その人なりの総合人間学を示すことは、学生の教育上からも望ましい。さらにいえば、人間科学がいかに人間を生かす「人間的」なものになりうるかを、(科学の没価値性に反して) 求めることも私の関心事であった。

すでに学部開設前に、人間科学部の個々の科目や領域を編集した、学部共同の「人間科学の体系」(文部省提出資料)、「人間科学概説」(川島書店1975)を私たちは出版していたが、私自身はそれを超えて、本格的に私独自の著作として、『人間学』(有斐閣双書1977、人間科学部一年次の人間学概論の教科書として使用)を記すことになった。それは「人間性」をたずねて、その生物学的基礎、その社会的な側面、そして心理的構造や機能を明らかにすること、さらに人間形成の事実と主観的体験的な「心」や「実存」にも光をあて、人間性を総合的にとらえていこうとしたものであった。

ただ私は「人間学」を、既成の科学的知見の上に立って哲学的ないし文献学的考察を加えるということにとどめたくなかった。私自身の人間観が臨床経験をはじめ、さまざまな人のユニークな体験的事実に立脚して成立している。そこで私はこの機会に、私が接した「人間性わ示唆する体験」(とくに人格統合的治療体験や自己超越的体験等の極致体験)の100例を整理、再検討し、体験科学的に論を進め、それと文献研究を体系的考察へと結びつけた。体験例として、内面的なものが多く、社会文化的視野のものが十分に含まれず、とくに生活学的ニュアンスのものに大きく注目しなかった点は、学部の理念とのずれを示したものだと思っている。以下に(学部運営との直接のつながりはないが)あえて私の「人間学」を若干詳しく紹介しておきたい。(文献的基礎は一切省略する。)

〈生命性と自己実現〉私がまず着目したのは「全身心で、力一杯、創造的に生きられるようになった」(瞬間瞬間が充実している実感)等々と表現されるような治療的体験その他の生命的体験であった。それは「ありのままの姿で自由に生きられるようになった」「他者の気持その他の現実がありのままに見えるようになった」等々の自己開示の体験と密接に関連していた。それは有機体的生命性の発現・発展を典型的に示すと解されるものである。生命体は、ある程度の逆境に耐えながらも、自己を自由に表現できるとき、最も自然な生命的な姿をみせる。それは内的均衡回復と成長・自己実現傾向をもった生命本来の姿であり、全身心的な過程であり、時々刻々の流れが生かされることである。

しかし有機体的過程が、生命的な相と、より固定化された構造的な相(自我)に分かれて観察される場合もある。自我は、そのつど生命性や外的状況を取り入れつつ分化・統合をくり返し、その過程は非可逆的発展の道である。構造化された精神的な態度は、生命の均衡回復力のようにそのつど流動的に発現するだけでなく、一步一步地固めをしながら自らを高めていく。従来の自己実現論においては、ある場合には自我の束縛からの解放が強調され、ある場合には自我の成熟、強化が強調されてきた。実際には、自己実現・成長過程とは、社会的拘束をある程度前提に

して、自我が統制・社会化されながら、（そのあまりに異質な側面が修正されるとともに、）生命性のその都度の発露を生みだし、高次の生命体として統合されていく過程、すなわち矛盾・統合の弁証法的発展の過程だと私は解釈したのであった。人間は一定の恒常的な構造・体制を維持しながら、絶えず新しい条件を取り入れて、よ高次の構造化に進む。この意味では、成長体験はその典型的な統合過程の一コマであり、自己実現とは絶ざる変化・発展の過程である。それは高次に精神化された構造（人格）を生み出し、また結果的には社会的に何かを生み出していくものであるが、基本的には「何を実現したか」という結果や産物の問題ではなく、その人なりの、いかなる状況下においても発現しうる生命的過程だと言わなければならない。（なお以上の生物学的基礎についてはここでは省略する。）

〈感情の世界〉以上のことは、人間が困難や葛藤をも統合していく過程の評価へと私を誘った。葛藤は、通常の病理の原因としてとらえられることが多いが、健康な発展にとって不可欠なものでさえある。その生物学的基礎についても、重要な知見が多くされているが、私の体験研究においても、それは無視し得ないものであった。それは従来自己実現論におけるような生命性の順調な発露にとどまらず、むしろ葛藤を基礎にした人間生活の苦悩が、複雑な感情の世界を生み出し、そこに高次に構造化されてくる人間性である。私の調査例において、それは主として感受性と現実認知の高次の相としてとらえられるものであった。すなわち「矛盾を含んだ自己の受容」「外界との絶えざる交わりが瞬間瞬間の意味を充実させる実感」「日常的な葛藤や不幸にもかかわらず、自己の深いところでのより大きな統合の実感」等々であった。その中でとくに苦悩と葛藤ゆえに高次の自覚化が進むことが強調されていたのである。ある中年女性は、数年間の家庭の苦悩と心的葛藤の不安定な日々の後に統合的体験をもったが、その後、魔的な（ドロドロした）心情を根底にもっているがゆえに、生命力も、人生の味わいも深いものになっているという実感が定着したという。それは葛藤以前の彼女の世界に比して、はるかに複雑で悲喜こもごもの感情のひだをもった豊かな、しかも深い安定を有したもののようであった。

私の考察はとくに支配—服従、能動—受動、愛—憎という、最も基本的な両極性とその統合に関して（哲学・文学・芸術論を参考にしながら）なされた。たとえば愛も憎も事実として受容した上での、より高次の愛である。とくに能動的に世界を切り開き、発展を求め、生を充実していく人間性の裏面として、休止・退行・衰退・死を必然的にもつ人間性を私は重視した。個人の人生や社会・文化の歴史を、進歩においてのみとらえるという根強い生産社会の価値観だけに従うときは、休息は必要悪であり、弱者は足手まといであり、被支配者は道具視され、衰退するものや死者は忘れさられてしまう。しかし、休息・衰退・死を裏腹に含んだ生を考えると、むしろ、一途に発展しえない人間と社会の本質が、洞察されてくる。

〈自己と自己超越〉私はさらに内面の問題として、感情の世界から存在の問題へと視点を移し、そして個我にもこだわらない領域に踏みこんでいった。それは特殊な存在感や宗教体験に接する領域を含みつつ「自己」の本質を問うことであった。近代的個人的自己は生活の姿勢によっ

て構成されたものであり、生活の条件や姿勢が変わってくれば「自己」の存在感も違ってくる。人間科学の諸知見は、個人的自己の形成過程とその態様の相対性を示すが、私自身による体験研究もそれを裏付けるものであった。たとえば「自分も他人もないような共感の境地」「自分が他者・人類とともに生きているという実感」「他者の愛、自然の愛などによって自分が生かされているという気持」等々の体験的事実である。さらに、宗教的か否かを問わず、「天地自然との合一体験」「時間空間を越えた存在体験」「大きな力の実感」「それによって生かされているという実感」など自己超越体験の事実もあげられる。そもそも自己実現の過程そのものが、自己が他者・外界との関わりで生きるその全体の系の動きを示している。開かれた境地においては、他者を愛することがすなわち自己の素直な心の表現になる。愛の合一においては、自他はひとつの系の二つの部分だという実感が示されることが多い。

このように人間性を、個体の身体内部のものとしてでなく、個体・環境系のものとしてとらえることは、常識とは明らかに違い。しかし、一般に「自分のことはその本人にしかわからない」と思われ、心は内部にあると思われていることは、あくまで自我において構造化され、その人の準拠枠でみたときのものであって、経験それ自体は、超個人的であり、他者のものでもある。それはトランスパーソナルな体験や理論において、自己と外界の区別が止揚され、内外不可分の一体化の境地として描かれているところのものでもある。人間が個としての独立性の面や、闘争や非共生的な面を多くもっているという現実を否定するものではないが、成長体験をはじめ、開かれた境地において、独立我から関係存在、それも「我一人の関係」といわれるような共同存在が開かれ、愛の極致におけるような自他を含んだ存在性が開示されてくるところに、人間の高次の発展段階を私はみたのである。そしてその極致に、有形の他者や人類をも超えて自然・宇宙と合一し、あるいは自己を無・空と化する自己超越の世界を見たのであった。それは、宗教体験のみならず一般人の超越体験にも多くみられるものである。(なお『人間学』では、自己超越に対応して、病者の自己喪失的な「無」や、共生体験その他の病理的な個我の変容過程をも詳しく取り上げ、病的体験と極致的体験との異同もかなり詳しく論じている。)

〈実存と価値〉しかしながら、少なくとも社会的現実においては、あくまで個別的具体的な人間の実感に立脚し、自分自身を含めて、一人ひとりの具体的な個人が自覚的に存在しているという、その自覚の上に立つほかはない。ここで自覚的態度形成の体験例から、実存様式の解明へと私は進んだ。すなわち地道な自己探求、愛や社会活動に賭けた自覚的態度形成の体験例を吟味し、またそれぞれの人の価値意識や実存様式を問うていった。

人間性の実現にとって、選択し決断する自由な主体としての自覚は、まさに人間を人間たらしめているところのものだといえる。実存主義哲学において、この自覚化の問題は最も端的に探求されてきたが、実存主義的発想を待つまでもなく、自覚的存在性の本質は多くの人間的体験の中に含まれている。成長体験において瞬間瞬間の生が強調されようと、人間の実現においては、ハイデッカーのとらえたような時間性の自覚において生が営まれることに変わりはない。それはま

ず、自我の高次の構造化、すなわち柔軟化された自我の計画のもとに、有機体がより成熟した構えないし態度をとることを意味する。それは普遍的価値に照らして目先の結果を超越しようとする、人間の努力の過程だともいえる。このような自覚化は、さらに他者・外界とのかかわりの自覚化、自己自身に対するかかわりの自覚化であり、大雑把に言えば、最も本来的な生き方を探求しようとする姿勢である。

しかし人間実存における価値の問題とは、単にある価値が与えられて、それに対し態度を選択する、というようにだけとらえることはできない。逆に実存そのものが、ひとつの（実証的には規定しえない）態度価値（フランク等）を生み出す、という見方もできるのであって、このような無条件の価値体験は、私の研究事例においても報告されている。それは「生命的な自己がひとつの人生態度として定着する」「それを自己満足に終わらせずに他者・社会に還元しようとする態度」「自己の人生を（ときには苛酷な運命を）積極的に引き受けようとする意志」「個人的、社会的な責任性の自覚」「究極的な自由、主体性の実感」「自己・他者を問わず、かけがえのない『人間』の実感とその尊重」等々の体験である。

私は一人ひとりの個別的な価値意識、体験様式、実存様式にとくに注意深く光をあてようとしたのだが、このことはたぶん最も深い意味での、人間の個別性を尊重しようとする私の人間学の基本につながるものようであった。客観的にとらえられた個性も重要であるが、しかしそれを外から与えられた価値に従わせるという発想につなげることもできる。これに対して、主体的に実存するその個別性は、その主体にとって絶対なものであり、個性を生かすとか殺すとかいう判断以前のかげがえのない現実である。これは主体としての自由や責任性の実感が現象的に疑いのないものであること、あるいは出会いにおいて、その相手がかげがえのない「汝」になることと同様である。そこにおいて偏倚者・病者・弱者の実存も真に尊重される。

このように実存的価値は客観化される以前の、かけがえのない一人称主体と二人称的交わりの尊重をもたらすが、しかし一方、現実には私たちは、客観的生物学的・社会的規定性から逃れるわけにはいかない。社会の矛盾を乗り越えていく実存も、この社会的規定性の自覚の上に立たずしては、実現に実を結ぶことはできない。人間の自由と責任性が因果的規定性を乗り越えうるとしても、それは単なるがむしゃらな努力によるのではない。いかにマイナスの要因を含んでいようと、社会的生物学的規定的を受けいれ、むしろそれを生かしつつ、それを超えていく道が探索されなければならない。

〈生活と社会・文化〉最後に社会的存在として、社会的に規定されつつ、社会・文化を創造していく人間存在の側面がある。今まで述べてきた矛盾・統合の論理は、決して個体レベルだけの問題ではない。自己超越の問題も、また実存の課題も、社会的、生態学的な面を含んで検討されはじめている。人間がその深層から、いかに社会・文化とともに歩むことができるか、あるいは自らの歩みを人間らしいものにしていくために社会・文化をどのように変革していけるかということ問うた場合、私たちは具体的に一人ひとりの人間を見据えながら、集団・社会を主体的に

とらえ直していかなければならない。私の調査した体験例からは、社会・文化・人類的存在性に関する体験として「生活に根をおろした安定感」、「生活の蓄積の実感」「生活文化の味わい」「人々の生活のニュアンス、個別的人間像の実感、その集積としての社会・文化の実感」等々が注目できるものであった。

ここで私はまず、生活構造や生活文化が個人の自我ないし内面にかかわる面を改めて問い、生活学・社会学と内面的人間学との橋渡しを試みた。こうした問題の探求は、何よりも、「個人と集団」「人間と社会」の統合の問題を探求していくこと、すなわち個人の側からの「共同存在性」、社会の側からの「個人を尊重した共同社会化」を含めて、現実の人間とその人間関係・社会関係を問いなおすことである。あるいは社会・人類的事実を見据えながら、それに個人を従属させるのではなく、個人をも、また人類全体をも生かしていこうとする主体的な社会的実存の要求としてである。あるいは一人ひとりの努力目標としてである。個体の自己実現がそう簡単に他者・全体の自己実現に結びつくわけでもなく、実存の自覚がそれ自体で人類全体を富ましめるわけでもない。また、少数の人の自己超越性、共同存在性、実存的自覚の深まりが、社会・人類の問題を解決するわけでもない。逆に個人を抽象化して地上に樂園を築きうるものでもない。個人がますます個として分化し、自覚が進む一方、世界が広がって一つになり、人類全体として（あるいは生態系全体として）自覚的な歩みをしなければならなくなっている現代である。個を生かしつつ人類全体を、しかもできるだけ「ホンネ」において問うていかなければならないわけである。

生物学、心理学における個体の研究からしても、また生態学、社会学、人類学という集合の側からの研究からしても、分化したそれぞれが統合されていく過程が確かに見られる。心理学的に認められる共同存在意識は、個我が確立されてこそ成立する自己超越の道であるが、これをある人の意識の問題にととめず、社会的・人類的事実の置き換えれば、それは高度に分化、統合された社会において、個人個人がまさに具体的なユニークな人間でありながら、社会全体の構造・機能の中に位置づけられ、社会・人類の保存ないし発展に結びついてとらえられるということになる。それは社会的なタテマエないし役割と個人のホンネないし意味とがいかに一致しうるかという、その原点を求めることでもある。また現に生きている一人の人間として、自己および他者の実感にもとづきつつ、しかも集合を自らのものとして、一貫した構造においてとらえるというテーマでもある。

以上が私の「人間学」の骨子であり、後に「人間性心理学大系」の第1巻（大日本図書、1985）においてさらに発展させたものである。総合人間科学としては、心理学それも内面の学に偏った嫌いはあるが、ともかく私なりの人間論といってもよいようなパラダイムを、なんとか作り上げて、私は人間科学部の教育・研究に乗り出していった。そしてその後もさまざまな個人研究、共同研究、臨床実践、学生の特許研究や卒論の指導等々が、このパラダイムの検証過程になり、またパラダイムをさらに発展させていく過程になったのだと思っている。

ただ、繰り返しになるが、この段階までくると、人間科学部の共通理念になるようなものでは

なく、あくまで人間科学部において、各人がそれなりの人間観を探求し得る、そのひとつの見本のようなものだと私は考えた。そして事実個々の領域における実証的研究に加えて、総合領域では、こうした「人間論」を、卒論としても許容し、応援したのであった。

3. 人間学の実践

私はさらに実践的人間学、とくに教育・心理臨床・社会福祉その他「人間を生かす」実践についても、総合人間科学的見地から、自分自身の実践例を含め、身近な実践例や文献を集めて、それぞれのもつ「人間的」な面を探求し、『人間学の実践』（有斐閣、1979）をまとめていった。

教育、福祉、臨床の共通項をまとめれば、いずれも、具体的全体的「人間」への個別のかかわり、生活に根ざした隣人同士の助け合い、のちの世代への配慮等々の素朴な共同存在的な営みを原型にもつということが出来る。社会の分化発展と文明、技術の発達により、これらの営みは、機能分化し、専門技術化し、社会的制度的に位置づけられるようになった。しかし、分化したそれぞれは、統合なしではすまされず、その統合の核として、個人個人を生かしつつ、共同存在的原点に立ち戻ることが要求される。このような統合的な意味では、教育、福祉、臨床という概念も便宜上のものにすぎず、これらの概念からはずれる実践もが、等しく問題にされなければならないわけである。たとえば大学教育に飽きたらない学生たちは、お互いを深める自主的なサークル活動を展開するかもしれない。あるいはそれを自己の中に完結させず、政治社会的活動やボランティア活動などに向けていくかもしれない。あるいは「こころ」が画一化されることに反発し、あるいは自然が失われていく国土を憂えて、自然保護運動などに入っていきかもしれない。これらはやはり人間性全体にかかわる「人間の実践」だということができよう。これらが、教育、臨床、福祉等の既成の活動から学びながらも、その枠を越えて、新しい人間と人間関係、集団を創造していくであろうことは疑いない。

原始以来、無意図的な自然な感覚によってなされてきた実践は、たしかに文明、文化の発達によって今日、意図的専門的な分化した実践に多く所を譲っている。その中で、専門的科学的背景がますます必要になる。しかし制度も技術も、「人間」や「生活」のある一面に注意した部分的なものである。したがって全体的人間や生活の問題は、常に既成の技術では及ばないもの、あるいは既成の制度からはみだした面をもつし、またそうした問題が絶えず作りだされるものである。技術的制度的論理としては、こうした谷間にある問題を包括する新しい技術や制度をさらに発達させることになるが、それも全体的視点あればこそ可能である。また、いかに技術や制度の網の目が作られたとしても、その背景に人間同士のナマの具体的な交わりがなければ対応は困難である。新しい技術制度が確立されるまでの間を補わなければならない非技術的・非制度的行為も要求される。しかもこれらの認識も実践も、当の「クライアント」「生活者」の主体においてこそ有効に機能することであろう。こうして既成概念を超えた実践が絶えず生み出され、それらの実践が、教育、福祉、臨床の幅を広げる一方、そのいずれにも属さない領域をも生み出していくとい

うのが私の実感であった。

さて私が参考にした「人間学的」実践例は、個々の人間の側に立って、人間を生かすべく、生活の現実に密着して行なわれている実践だという漠然とした基準で選んだものであり、その具体的な姿はとても概括できるものではなかったのであるが、私なりにあえて「人間の実践原理」とでもいうべきものを、総括した結果は次のような点であった。

すなわち「人間的」実践では、人間の全体性、有機体的な自然の統合力（ないしは自然性の発露）と個別性の尊重が不可欠であり、そこにおいて社会性・共同存在性も本物となる。それは生活の現実に根ざしたアプローチとともに、目先の効用を超えた深層のアプローチを必要とし、かつ一人ひとりの実存・責任性をも問うものである。そこでは実践者と対象者との全人間のかかわりが不可欠となる。「我一汝」の交わりに立ち返り、生活の中で生活者としての隣人同士が交わり合い、助け合うという素朴な姿は、庶民的な「理想ならぬ理想」に立ち返るということでもある。

もちろん一面において現代の人間の実践は、方法的にも技術的にも高度に専門化した面をもっており、実践的交わりも科学的・技術的に吟味される。しかし実践技術が専門化しても、いや専門化するほど、素朴な交わりが見直されなければならない。ここで対象者自身の主体による自己成長、自己回復、生活の建設が問われ、対象者と同じレベルに立った「隣人」が、それを援助する過程が重視される。各実践領域の専門家といえども、こうした素朴な「人間性」「隣人性」を必要とし、また実際に素人や隣人とのチームワークが欠かせない。政策、制度にかかわる問題においても、単に政治・行政主体（官公庁など）の側に立って何ができるかという発想ではなく、裾野の広い一般住民の立場に立って何ができるのかという発想が必要になるのである。

私自身、心理臨床や社会活動に従事してきた経験からして、主体的な自然な人間性に根ざし、クライアントも、親その他の関係者も、そして専門家も、その固有の自然な人間性に根ざしつつ、知識や技術を同化していくことの重要性を感じている。心理臨床において、治療者の素朴な自然性を大事にしつつ、しかしそれだけでは限界があることをふまえ、私たちは常に専門的知識・技術を取り入れながら、それを自己の自然性と統合していかなければならない。それが個人でいえば自己教育・自己発展の道である。専門的知識を深め、訓練を受けながら、なおかつ絶えず自然な自分らしさに立ち返ることを通じて、それは徐々になされていく。

同様に社会活動も、多くの場合、素朴な営みを超えた組織活動にまで発展しなければならず、そこではより広範な組織力、政治力、客観的判断に頼るところが大きい。巨大な社会事象になればなるほど、人間の実感を離れた抽象的規則に依存することが避けられない。また政治力をもった人や行政テクノラートに依存しなければならない面も多くなる。ここでも複雑な知識、技術、制度が、いかに素朴な生活者の声を反映し、自然発生的行為と両立しうるかが問われる。おそらく社会思想、知識、技術などが抽象観念やイデオロギーを越えて生活の実感・態度の中に取り入れられ、素朴な人間性・隣人性の中に血肉化されてこそ、複雑な社会の中に生活者のナマの

「人間」を反映させていくことができるであろう。あるいは文明社会の中において個々の素朴な人間性と生活を回復する力になりうるであろう。（以上、2, 3節, 主として拙著「人間性心理学大系第10巻」大日本図書1989より）

以上総合人間科学の探求を「人間的」な生きたものにすべく「人間学」として探求してきた、私なりのプロセスをおおまかに述べてきたが、こうした理念を容易に普遍化できないことは、前に述べたように、文教大学人間科学部のなかでも、私がわきまえてきたところである。むしろ文教大学人間科学部は、個々の教育の個性を生かして（学生たちの個性にも基づきながら）発展して来たのであって、それが第1節に述べた抽象的理念を、おおよそ共有してきたものだともいえる。学部内でのこうした点をめぐっての、研究会などが、さらに濃密に行われれば、個人個人の探求と、学部の共有理念とのダイナミックな関係を高めることも可能であったのではないかと思っている。

いま、さらに大きなスケールで、諸大学人間科学部間の交流がなされ始めている。その中で、個別研究にせよ総合研究にせよ、また行動科学的アプローチにせよ人間学的アプローチにせよ、情報交換や、場合によっては大学間共同研究も可能になるかもしれない。モデルのあまりない道ではあるが、今後の発展に期待を抱きつつ、筆を置かせていただきたいと思う。

以上

（みずしま けいいち 文教大学教授 臨床心理学専攻）